

『見えないネズミたち』

シリル・スコット

杉野久和 訳

一

郊外を走る電車はこみあっていて、何度も停車した。車両の端に座る二人の若者はそれぞれのことに没頭していた。一人は夕刊を読み、もう一人はノートでなにやら計算をしていた。夕刊を読んでいる方の若者は、もう一方の若者に記事の一部を引用して伝えたり、あれこれ話しかけたりしていた。この男がジョン・ウインターである。背丈は小さいがよく肥えていて、数年後には恰幅がよくなっていそうだった。瞳はとても青く、髪の毛は美しい。肌は綺麗に剃られていた。頬はピンク色と白色が入り混じっており、唇はとても赤い。ファッションは最新のもので暗い青色の衣服を身に着けていた。瞳と同じ色をしたネクタイをいつも着けていて、よく似合っていた。ただし例外として、彼の衣服に似合わず明らかに配慮を欠くところがあつた。荒々しくも情愛深い態度で、声がやかましい。興奮したり興味を抱いたりすると男の子がしてしまうように帽子を脱いで髪をかきあげる。

隣のジェイムズ・スプレイグはジョンの妨害に気を悪くすることなく、気軽に返答していた。二人の気分は最高だった。お互いをよく理解しあっていることは明らかだった。

ジェイムズは細身で背が高く、手足は大きい。むらのない黒い肌は血色が良い。他の部位もとにかく大きく、口は一文字に結ばれている。彼の黒髪のようにきちんと揃えられた茶褐色の口髭が分厚い上唇を覆っている。入念に選び抜かれた衣装は、極めて地味な彼の好みを表わしている。首巻の縞はとても細く、袖口や靴といった服装の細部には染み一つなく、彼が容姿にたいへん気をつけていることを示している。ジェイムズの声は低い調子に抑制されている。話し方はゆっくりとしていて、ときどきとても魅力的に微笑むことがある。

その日は雨が降っていた。ある駅で停車すると可愛いらしい女性が乗り込んできた。彼女の雨合羽と傘からは水が滴っている。ジョン・ウインターは通路からもっとも遠い席にいたがすぐに立ち上がって自分の席を譲った。ジェイムズは女性が目の前を通らなくてもいいように隣の席にずれて、再び計算にとりかかった。ジョンはつり革に手をかけ、新聞を読み続けたりジェイムズに話しかけたりしながら、席を譲ってあげた女性の横顔をチラチラと見た。慎ましく自分の手袋をみている女性は、ジョンがジムに言っていたシャレを

聞いて笑っていた。列車が三駅過ぎたところで女性は立ち上がり、立っている男性の愉快で子どもじみた顔をチラツと見て、電車を降りていった。ジョンの目はドアへと向かう女性の後ろ姿を追っていた。

「ジョン、どうして座らないんだ？」ジェイムズが計算から目を離すことなく尋ねると、ジョンはかなり唐突に座席についた。「俺らはハウランド家の地下室の壁にセメントを入れないといけない。彼には今日言ったが、見積もりに含まれている」

「彼が会社にやって来てたなんて知らなかった」ジョンは応えた。「いつ来たんだ」

「お前が昼食から帰ってくる前だな」

「僕はモザイクタイルを見ていたんだ」ジョンは釈明した。「だから遅れてしまったんだ。ハウランドにとっても会いたかったよ。僕の内装計画に彼は何か言っていたかい」

「彼に見せたが、お金が足りないと言っていたな」

「彼のぼろ家に手を加えてきたのに残念だな！」ジョンは声を大にして言った。「ヤギと同じくらいセンスがないんだ」

「明日また来るだろう」ジェイムズは頬をゆるめた。「だから、自分で話せるさ」しばらくの間をおいて「ルーシーは母親が来ると思っている。いつ到着するんだ？」

「明日さ」ジョンはしかめっ面で答えて、また新聞紙を持ち上げた。

ジェイムズは計算を再開した。「ここだ、起きろ」窓の外を見ると列車は小さな駅に入つて速度を落としていた。「ここがローズデインだな。おそらくここで降りる」二人は車両から降りた。

ジョンが住む通りまでやってきた頃には雨は止んでいた。可愛らしい庭の前で二人を出迎えてくれたのは、ウインター夫人と息子のデイミーだった。

ルーシー・ウインターの笑顔はおっとりとして温かった。子どもも温かい感じだったが、父親のようにせっかちだった。ルーシーがジョンにキスをしたとき、ジムほど強壮かつ沈着でなければ狼狽してしまうほど敬愛たつぷりにデイミーがジムに飛び掛かった。

(デイミーは、スプレイグ「ジミー」からとられている。)

ルーシーは体が大きいわけではなく、手足が小さすぎるわけでもない。肉付きはよく、腰回りは広く乳は垂れている。質がよく量も多すぎない彼女の髪の毛は、名状しがたい茶褐色で耳のうえに整えられている。均斉がとれすぎた鼻と、大きくもくつきりと美しい口。ねずみ色で、透明さと率直さをあわせもっている瞳。彼女が「可愛い」と言われていない訳といえば、彼女の性格がとても重苦しいことと耳から頬までがやたらと長いことである。

彼女は部屋着を身に着けて、さっきまで着ていた袖がギンガムチェック柄のエプロンを腕にかけていた。体が丈夫すぎるわけではなかったが、ルーシーは健康そうな雰囲気醸し出していた。話をするときには単刀直入に切り出す癖がある。

デイミーは華奢な四歳児で、父親ジョンのような特徴と表情に加えて母親ルーシーのような立派なねずみ色の目をしていた。白色のブラウスとズボンを身に着け、白色の靴と靴下を履き、オランダ風に短く切った黄色い髪の毛をして、健康で快活そうな様子だった。

「なんと見事な雨なんだ」ジョンはクスクス笑って愉しんでいた。「電車は嵐の中を進む船のようだったんだ」

「そうだったの？」ルーシーは笑って、夫のコートの袖が濡れていないか確かめた。「足は濡れたの？ ジム、あなたも濡れた？」彼女はこう言って、ジェイムズ・スプレイグと暖かく握手を交わした。

「大丈夫」二人は答えた。「まるでタップダンスしているようだったね」ジョンがこう言うとうと、みんなは笑った。

「水たまりを踏まないでよ」ルーシーはジョンに注意してから、みんなは家の中に入っていた。

* * * * *

ジムは帽子と雨合羽を玄関にかけてから夕食の準備を手伝った。こうすることが彼のいつもの役割だった。

「お手伝いは大丈夫よ」ルーシーは元気よく言って、彼が部屋に戻るよう促した。「私が準備している間にあなたたち男性はカクテルの傍にいないとね。もうすぐ出来るわ。ジム、あなたは食材がどこにあるか分かっているわね」

カクテルで酔っているジムは冷蔵庫に氷を取りに行き、カクテルシェーカーが見つからないと声を出した。

「あれはどこに行ったんだ、ルーシー？」

「どうして探さないのよ」

「探しているさ」

「あるじゃない」彼女は貯蔵室からシェーカーをもってきた。「もしこれが蛇だったらあなたに噛みついていたらわね」

「ああ。スープがいい匂いだ」ルーシーが蓋を開けて鍋をテーブルに置くとジムは言った。「何のスープ？」

「後でご覧なさい。カクテルを片付けないとスープが冷めちゃうわよ。ジョンを呼んできて」

ジムは従った。ジョンはたくさん間違えながら『タンホイザー』の「イヴニングスター」をピアノで弾いていて、たった今リビングから戻ってきた。ルーシーはスープを入れた。

「座ってちょうだい」ルーシーが求めた。「ジム、あなたの席はわかるわね。デイミーはどこ？」

「連れてくる」ジムはそう言って、台所を通過して出ていった。「きみのカクテルが残っている」

ルーシーはグラスを手にして慎重に味わった。「私は嫌いね」顔をしかめてジョンに言った。

「女たちはドライカクテルが駄目なんだ」ジョンは笑った。「それはマティーニだ。僕らは女性たちにマンハッタンを作ってやる。本物とそっくりだ。ジムが調合したアルコールの味なんてそんなに長続きしないだろ」

ジムはデイミーを連れてきた。夕食が始まった。

「ずっと考えていたんだけど」ジムはルーシーとジョンを交互に見て言った。「レヤード

のところみたいな会社と合同ですべきだと思う。そうすれば、より大きなことが出来る。供給会社と近い」

「スープのおかわりはいかが？」ルーシーが勧めた。

「欲しいな」ジムはお皿を彼女に手渡した。「思っていたとおりの美味しいよ。何のスープだい？」

「食べたのに分からないあなたに名前を言うなんて無駄よ」と言ってルーシーは笑った。

「新しい焼却炉についての契約が上手くいけばな」ジムは落ち着いていた。「俺たちは発展する。実際に、俺のそこには話が持ちかけられてきた。ただ、資材を扱う人たちと知り合っていないかったし、取りかかるための資本がなかったから考えられなかった」

「レヤードさんと合同会社にするの？」デイミーのために肉を小さく切り分けていたルーシーが尋ねた。

「そうはならない」ジムは微笑んだ。「俺たちは小さすぎる。もっと余裕をもって、俺たちの計画のために提供してもらおう」

「なるほどね」ルーシーは頷いた。「あなた、お腹すいていないの？」ジョンに尋ねた。「スープがまだ残っているわ」

「いや、大丈夫さ」ジョンは彼女を安心させた。「ハウランド家のための色使いを考えていたんだ。彼が望むようなスレート屋根の影が僕は嫌だ。レンガと相性が悪いからさ」

「そうね。夕食を食べて、あなた。食べないと頭が痛くなるわ」

ジョンは美味そうに食べ始めた。

「何について話していたんだい」とジョンはジムに尋ねた。

「焼却炉だ」とジムは答えた。「俺は手に入れたい。そうしないと、小さな住まいにこだわり続けられないといけないだろうし現状ちっぽけだ」

「焼却炉か！」ジョンは髪の毛を掻きあげた。「建築家にとっては夢じゃないか！ ゴミ箱と一緒に装飾できそうだ」

「そうだな」ジムは強調した。「儲けに繋がる。俺たちには必要だ」

「そうね」ルーシーが入ってきた。そして、デイミーに向かって「ナイフを使っちゃだめよ。お行儀悪いわ。ママに見せて。フォークをそう持つのよ。偉いわ」

「金は大丈夫だ。金が全てじゃないさ！」ジョンが叫んだ。「芸術家は肉や服なんかより大きな夢がある。だけどこの国じゃ芸術的なことをできる仕事は一部なんだ」

「あるいは、ほかの国でもな」ジムが修正した。

「ああ、僕らは制限されている」ジョンが言い返した。「だから僕はヨーロッパに行きたいんだ。情緒を味わって酒を飲む。全能のドルが最高位にいない場所で暮らして研究する！理想にしがみつこうとしてきたけど、パンのためにあくせくしていると阿呆と滅びが待つ醜い小屋に引きずり降ろされる。そして、焼却炉を手にする。おそらく僕らは店をたたんで家を出る。そして、街のゴミ捨て場にたどりつくだろうな」

ジムは笑った。

「金を手に入れよう。初期トスカーナや後期印象派に浸るんだ。やりたいたいだけ水彩画をやってみよう」

「ええ、お金は可能性ね。私達にとっても、デイミーにとっても」ルーシーはより真剣に付け加えた。

「そうさ、きみ達お二人様がぼくらを雇って仲介業をさせてくれればな。建築スタジオを作る代わりにさ」

「もし俺にお金があれば、肥料となる植物を育てるだろうな」ジムは宣言した。

「ああ、僕は違う。父親の魂で購入した利益を子どもが欲しがると僕には思えない。

そうだろ、デイミー」ジョンはデイミーの髪の毛をクシャクシャにした。

「ぼく、風船が欲しい」デイミーが言った。

「遺伝だな」ジムがクスクスと笑って、ルーシーは声を出して笑った。

「皆、先祖返りだよ」ジョンは言い返した。

「先祖蛙？」デイミーが尋ねた。

「ジムおじさんに聞いてみな？」

デイミーはジムが話すのを見ていた。「次来るときには何か持ってくるよ、デイミー」

「ところでルーシー」ジョンがまた話を始めた。「思い出したんだ。お義母さんが明日やってくるのはどの電車だい？」

「七時丁度の電車だと思うわ」ルーシーは立ち上がって台所のドアのそばにあるテーブルの引き出しから手紙を取り出した。「七時一〇分のC W線」彼女は訂正して、手紙を見た。

「午前中だっけ？ 午後だっけ？」

「分からないの」ルーシーは再び手紙を見た。「時刻表が欲しいわ」

「女らしいなあ」ジョンはからかうようにルーシーを見た。

「朝の電車だ」ジムが教えてくれた。「夜の七時一〇分に到着する電車はないが、朝には

ある」

「そうかい、メモリー教授を連れて記憶をしつかりとさせとかないと。ジムは頭の中に使えない事実を詰め込んで歩きまわっているんだな」

「これは違うわ」ルーシーは微笑みながら言った。

「夜まで来ないと思っていた」ジョンはため息をついて、タバコに火をつけた。

「ジョンは昼間のうちにハウランドにビザンツ装飾を勧めたかったんだ」ジムは自分のパイプを取り出しながらルーシーに説明した。

「そうなんだ」ジョンは認めて、煙の輪っかを吐き出し、その中に指を入れた。

しばらくの沈黙があった。ジムのパイプは調子が悪そうだった。

「ぼく降りたい」デイミーが言った。緊張が解けたようだった。

「ママに前掛けを外してもらってからだよ。どこに行きたいんだい？」

「ぼく、ジムおじさんの膝に行く」

「ジムおじさんはコーヒーがまだなんだよ」

「おいで、デイミー」ジムは呼んで、椅子をテーブルの横にくつつけた。「これで大丈夫。

コーヒーもデイミーも、な」

「この問題について自意識を費やす必要はないね、ルーシー」ジョンはモテない対象の

方を向いた。「僕らはジムから何もとらないのにさ」

「そうね」ルーシーは素早く同意した。

「これが僕らの最後の晩だよ、ジム」ジョンは髪の毛を掻き上げた。「ルーシーの母さんが僕のことを忘れていたって当然だよ。だけど、僕の罪が彼女の娘さんと結婚していることなら、彼女が想像しているほど僕は嬉しくないね」

「あなたと結婚するずっと前からママは私に厳しかった」ルーシーは真面目にそう言う
と、デイミーを見つめた。

「だけど、エスカレーターしている」ジョンは言い張った。

「自己満足は最重の罪だ」ジムはこう言うと、デイミーの襟を正した。「雨が降り出した」
こう言って、窓の方を見た。

「ママを見たらきつと驚くわ」突然ルーシーは断言した。

ジムは笑った。「ルーシーの親戚だったら俺は大丈夫さ」

「そんなわけあるかよ」ジョンが遮った。「僕は辛かったんだ」

「誰も悪くないの」ルーシーは強く言った。

「君もだ、ルーシー」ジムは言った。

「その通りだよ」ジョンはこぼした。「僕が思うに、今は自尊心のために少しだけ悪口を言うときなんだ」

ジムはパイプをふかして、天井を見つめていた。「ああ、ジョン。ルーシーが我慢してるならお前もそうするべきだ。ルーシーの言うことを一蹴すべきじゃない」

「いいえ、ジム」ルーシーが慌てて言った。「ジョン以外の誰だって怒るはずよ」

ジョンは他のタバコに火をつけた。

「なんでもないよ、ルーシー。僕は嫌いにならない。誰だって、たとえ君の母さんのような人でもさ」

「誰だって嫌ってるわ」ルーシーは言い張った。

「お義父さんがうちに来たことあるから君の母さんは怒っているんだろうね」ジョンは困惑しながら笑った。

「ええ、パパは私が反対することは何もしなかったわ」ルーシーが言い放った。

ジョンはまた髪を掻いた。「どれだけいてるかも分からないような見知らぬ人が家に来て嬉しいわけあるかよ。どれだけいい人だとしてもさ」

「それに、助けて欲しいときだけ連絡する人なんてね」ルーシーは不慣れにも痛烈に言

った。

ジムはパイプから灰を落とした。「お義母さんにイライラするのは仕方ない」

「気を付けるわ」ルーシーは苛立っていた。

ジムは微笑んだ。「あのことがジョン以外の誰かだったら、どうだ？」

「あのことがジョン以外の誰かだったら」彼女は繰り返した。「確かにね」

「ジョンは家族の名誉だ」ジムはジョンのところへ行つて、反抗的な髪の毛を引っ張った。

「そうね」ルーシーは強調した。

ジョンは立ち上がつて、テーブルを回つてルーシーの所へ行つた。

「愛しいよ、ルーシー」そう言うど屈んで彼女の額にキスをした。

彼女は立ち上がつて、夫の反抗的な髪の毛を撫でた。

「デイミーはどこに行つたの？」

「ここだよ、ママ」デイミーはテーブルの反対側の下から呼びかけた。

「おいで。お片付けを手伝つて」

「俺もする」ジムが申し出た。

「お皿をふいてくれるかしら」

二

時刻は午前八時になった。

ウインター家の食卓には、ルーシーと夜通しローズデイーンにいたジムが座っていた。ジョンはルーシーの母親を迎えに早朝から郊外の電車に乗っていた。デイミーは庭の古いニレの木の下にかかるブランコで遊んでいた。ルーシーは五時半からジョンの朝食を準備し、息子のお風呂と食事の面倒をみてやり、自分のとジムの食事を準備した。今は散らかったテーブルの上を静かに見つめている。

「二人がやって来る前に片付けなきゃいけないわ！」ルーシーは立ち上がってきちんとエプロンをつけ、お皿のパン屑を払い落とした。

ジムはパイプを取り出して煙草を詰めた。

「おそろくだが君のお母さんは朝食を食べてない」

ルーシーは首を振った。「ジョンが町のどこかに連れて行ってってくれるわよ。ここに着くまで何も食べないなんてママにとったら遅すぎるわ」

ジムは立ち上がって残りのお皿を手伝った。「君は何か他のことをしていてくれ。俺がすぐに終わらせる」

「無理よ！」ルーシーは断った。「カバンに入っているお仕事をして。昨晚ジョンはあなたを追いかけていったとき、難しいお仕事だと言ってたわ」

「わかった、ルーシー。君の言う通りにする。新しい契約のために計算する」ジムは隣の部屋の方へと動いた。

「私は邪魔しないけど、デイミーを入れないほうがいいわよ」ルーシーが彼に呼びかけた。

「見積もりはほとんど終わらせている」ジムは廊下の方へ向いた。すると、ルーシーは手をとめて、彼女には珍しく放心状態で窓の外を見つめていた。

「ジョンたち見てないか？」

ルーシーは首を振って、顔を逸らした。

「ルーシー、泣いているのか？」ジムの声には驚きと、いつも以上の感情が込められていた。ジムはルーシーの涙を見たことがなかった。

ルーシーはジムの方を向いて、よく分からず微笑んだ。

「ジム、私はね皆に公平であるのがしんどいの！」ルーシーは皮肉っぽく説明した。

「ルーシー、人は公平に接されると怒らない」

「あなたは物事を言葉にできるわ。私が幼かったころ、物事を納得できるようにそれはよくよく考えていた」彼女の声は尻すぼみに弱まっていく。「ママはね、私にパパの悪口を言つて欲しいのよ、ジム。でも、私できない」

自動車のクラクションが続いて、停車する音が家の外から聞こえてきた。ルーシーはギリとした。

「やあ！」ジムは部屋に飛び込んできたデイミーの方を向いた。「きたよ！きたよ！」と叫んだデイミーは再び部屋から飛び出していった。

ルーシーは当惑している。「どうして、こんな時間に電車がローズズデイーンに着くなんて」ジムは励まそうと笑っていた。「取り越し苦労をするな、ルーシー。君のお母さんをジョンが車で連れてきたんだ。二人はそんなに悪く思いあつてるわけではない」

ルーシーは玄関の方へ向かったが、躊躇いもあった。扉の開く音がして、いくつかの足音が聞こえた。

「さあ入って、ナニー」ジョンの声がした。そして、おかかえ運転手に「荷物を入れて

くれ」と言う声が聞こえた。すぐにジョンとルーシーの母親がダイニングルームにやってきた。後ろからデイミーが付いてきていたが、構って貰えず悲しそうだった。

来客の「マーウエント夫人」は小柄で優柔不断な仕草がある。可愛いらしさと作られた女性らしさがある一方で、彼女は目以外に際立った特徴がない。目はルーシーと同じ目の色をしていて、飛び出していた。彼女の身を包むのは申し分ない旅行服で、彼女には若すぎる。念入りに白粉がつけられた顔には、赤い口紅が塗られ眉が引かれていた。よく見ないと三〇歳くらいでおる。

ナニーとルーシーは少しの間黙って見つめあった。二人はどうやって挨拶をしたらいいか分らなかった。

「驚いたかい？」ジョンは荒れ狂うばかりだった。

マーウエント夫人は子どもっぽい臆病な笑いをした。「ルーシー、あなたはわたしにキスしてくれないの？」軽やかな素振りには気まぐれだった。彼女の視線はルーシーの肩から炉棚に寄りかかるジムへと彷徨った。

ルーシーは母親に静かなキスをした。その唇にはほとんど口紅が塗られていない。動揺を隠そうとしたマーウエント夫人はルーシーの髪と肩を意味もなく撫でた。

「来てくれて嬉しいわ、ママ」ルーシーの声はほとんど聞き取れなかった。

「ああ、とんでもない旅だったの」マーウエント夫人はクスクス笑った。

ルーシーの透き通った目はしっかりと母親を見ていた。ジョンはジムの方を向いた。

「ナニー、こちらがジム・スプレイグだ。世界一の親友だ。そして最悪の敵だ」

ジムは前に出て握手した。

「転ばぬ先の杖ね」と彼女は笑いながら言った。「貴方がわたしたちの敵にならないことを祈るわね」

「心配には及びません、マーウエント夫人」ジムは笑って返した。

「ジム、僕らにはナニーって呼んで欲しいらしいんだ」ジョンが口をはさんだ。「みんながナニーって呼ぶんだって」

ジムはお辞儀をして再び微笑んだ。

マーウエント夫人はまずジムを見てから、自分の娘を見た。「わたしたちはね、あなたが外出していると思ったの」と、ルーシーを見つめて言った。

ルーシーはすぐに答えた。「私は玄関に向かっていたわ。でもママがすぐに入ってきたから間に合わなかったのよ。ママが車でやってくるなんて思わなかったわ。だからママが扉

を開けるまで気付かなくて」

「二階にいたのかい？」 ジョンが尋ねた。

「いいえ、ここにいたわ」 ルーシーが返事をした。

マーウエント夫人は娘の夫の腕に手を置いた。

「いいの」 彼女はぶつぶつと言ってから自分の娘に「ルーシー、あなたの気に障らなければ、わたしは自分の部屋に行つて見苦しくないようにしたいの」

「ええ」 ルーシーはこれに応じた。「ママの荷物は玄関にあるのよね。ちょうど今——」
この一大事に、デイミーがそつとルーシーの傍にきて母親の服に顔を埋めて泣きだした。
ルーシーは身をかがめた。「どうしたの、ねえ」 彼女は尋ねた。

「あの人、ぜん…、ぜんぜんね、ちよつ、ちよつとも…」 デイミーはむせび泣いた。

「そうそう」 マーウエント夫人が話しかけた。「わたしとしたことが。さあ、わたしにキスしてごらん」

ルーシーはデイミーを押し出した。

「放して」 子どもは躊躇った。

「坊やはとても人見知りするのね」 マーウエント夫人は笑った。

ジョンが前に出た。「デイミー、ナニーにキスするんだ。どうしてそんな行動するんだよ」

「急かしたら可哀そうよ、ジョン」マーウエント夫人はさとした。「わたしが知らない人だからね。すぐにねんねするわ。そうね、ジミー？」

デイミーは母親の手を握りしめたまま答えなかった。

「デイミー」ジョンがいかめしく言いつけた。「ナニーに返事をするんだ」

「もう、ジョンったら」マーウエント夫人は再び口をはさんだ。「その子の思うままにさせてやりなさい。とても些細なことよ」

「部屋まで案内するわ、ママ」ルーシーが静かに申し出た。

マーウエント夫人は訝しげにジョンを見つめて、娘の後に続いた。デイミーは一緒に歩いて行つたが、母親の手を離さなかった。

「上手くやったようだな」ジムは二人の女性が二階へ上がってから言った。

「ああ。あんなに長い旅の後に彼女を電車で連れてくるなんてけち臭いからさ。彼女はあらゆる種類のことに、その、快適なことに慣れてるんだ」

ジムは黙ってパイプに火をつけた。

男たちは煙草をふかして、女性たちが下りてくるまで新しい契約について話しあった。

女性たちのことは話題にのぼらなかつた。ルーシー母娘が下りてきたとき、母親の方は淡い緑で透けているけっこうな部屋着を着ていた。ジョンは賞賛し、マーウエント夫人は銀白の笑みをこぼした。

「ああ、これね！ わたしが家の近くで着ている古くて簡素な衣装なの。スプレイグさんならすぐに見慣れてくれると思うの。家族の一員だつて聞いているわ」

ジムはルーシーが台所を行ったりきたりするのを見ながら答えた。「大変お似合いです、マーウエント夫人」

ナニーはジョンに膨れっ面を向けていたが、ジムは続けて言った。

「俺たちは街に行ったほうがいいだろう、ジョン。ハウランドが一〇時にきて、家の最終計画を確かめてから契約書にサインする。特にお前は内装の概要を彼に話したかつたんだろ」

「わたしのカバンをあんな運送会社に託して大丈夫だと思う、ジョン？」ナニーが割り込んだ。

「ああ、必ず大丈夫さ、ナニー。多分、日暮れまでには届けてくれる」

「そうね、運送会社のお店まで行って、送ってくれるか尋ねてきてくれないかしら。荷

物がとても心配なの」

「わかった、お店に着いたらかけあってみるよ」ジョンは心よく請け負った。
ナニーは小さくため息をついた。

* * * * *

二人の男たちが街へと向かう電車に乗って腰かけたとき、ジョンはマーウエント夫人がやってきたことを熱っぽく語った。

「不自然な空気がなくなつて嬉しいんだ。ルーシーにとつても母さんと一緒に過ごせるのはいいだろうね」

ジムは答えなかった。

「マーウエント夫人はずつと独りなんだ」ジョンが続けて言った。「彼女はとても酷い扱いをされてきた。女性には世話をしてくれる男性が必要なんだ」

返事の代わりにジムは唸った。

三

マーウエント夫人はジョンとジムが角を曲がるまで見つめていた。二人が見えなくなる

と夫人は朝食の皿を洗っているルーシーの近くにある台所机のところに腰かけた。

「手伝うわ」ナニーが申し出た。

「いいの、ママ、ありがとう。多くないし、すぐに終わりそう」

「わたしに出来ることがあつたら何でも言うのよ」母親は続けて言った。「ジョンやあなたへの重荷にはなりたくないの。わたしが手伝おうとしてることを分かつてほしいの。起こつたことに何も嫌な思いを抱いてないわ」

ルーシーは驚いて母親を見た。「そうね、今日は旅の疲れをとつてくれたらいいの」少しの間を置いて彼女は答えた。陶器の食器棚にお皿を移していた。「きつと疲れてるもの」

「わたしはね、列車であんな酷いサービスを受けたのは初めてよ」マーウェント夫人はダイニングルームに行つて揺り椅子を台所へもつてきてから再び話し出した。「殺菌済のコップはなかったし、寝台に電球もないの。あんなにも古びた時代遅れの車両が許されているなんて思わなかったわ」

ルーシーは少しの間黙つて家事をした。

「でもね、夕食のサービスは良かったの」ナニーは続けて言った。「若鶏のフライはとっても柔らかくて肉汁が溢れてきて口の中でとろけたのよ」

「私は新婚旅行で郊外の電車に乗ったきり何にも乗ってないわ」

「ああ、ルーシー、わたしにとったらなんて酷い時間だったのかしらね！」マーウエント夫人はハンカチを取り出した。

「手紙では起きたことについては話さないって書いてたわね、ママ」ルーシーは優しく訴えた。

「ええ、ルーシー、わたしみたいな経験をしたらそんなにすぐ忘れないの」マーウエント夫人は断言した。

ルーシーは再び黙った。

「でもね、わたし、つらい思いをしてないの」ナニーは続けて言った。「可哀そうなお母様はね、あなたがいなくなつたことに耐えられなかつたそうだけれどね」

しばらくしてからナニーは旅の話に戻った。

「町から離れてどこかに行つてないの、ルーシー？ わたしはね、同じところにずっと居てると沈んでくるの」

「私たちは旅行する余裕なんてないわ」ルーシーは語気を強めて言った。

「ええ、わたしもよ」マーウエント夫人は揺り椅子の上でもっと気楽な姿勢をとった。

「わたしの親愛なる友、ウォルシュ先生のご好意のおかげでこうやって来れたのよ。途中でまで一緒に来てくれて、旅が終わるまでわたしが誰かのお世話になれるよう取り計らってくれたの」

ルーシーは昼食の準備で忙しかった。

「わたしのカバンが無事だといいわね！」ナニーは大きな声で言った。「わたしはね、チエックしていた男の見た目が好きじゃなかったの」

「カバンは大丈夫よ」ルーシーは母親を安心させた。「心配しなくてもいいわ」

「あなた、コーヒー飲んだの」母は尋ねながら台所を観察した。

「ママとジョンは朝食を済ませてくださいってわ」ルーシーは謝った。

「ええ、そうね。でも、とつても朝早くて、興奮していたからほとんど何も食べれてなかったの。もしあなたが、コーヒーにお菓子の一つや二つを用意してくれていればね。お昼まで何も食べないんじゃないか心配なの」

「そうね、ママ。少し待ってて、コーヒー淹れるわ」ルーシーは話しながら水を計った。

「わたしはね、もうとつくにしていると思ってたわ。お願いしなくてもね」ナニーは言い張った。「わたしは余分なことをしたくないの」

「ええ、大丈夫よ」ルーシーはカップ、受け皿、スプーン、大皿を台所テーブルに置いた。

「わたしがしなくちゃいけないわね」マーウェント夫人はルーシーに不服な様子を示した。ルーシーは砂糖入れとミルクの入った容器を母親の前に置いた。

「できたわ、ママ」

「あなたが全部してくれるなんてね」そう言うと、ナニーは朝食の残りだと気付いていたがコーヒー、クッキー、マフィンをいただくことにした。

「お昼は私たちだけよ。ジョンは昼間に帰って来ないわ」ルーシーは母親に教えた。ポットの蓋を開けると、美味しそうな匂いが漂った。

「苺とソフトクリームを食べましょう」ナニーが提案した。「わたしはね苺が大好きなの。喉の奥に入ると喜びで震え上がるの」

「あるか分からないわ」ルーシーが言った。

「あるわよ。街の大きな果物屋さんで見つけたの。ジョンが朝食用にとって買ってくれたの」

「今食べられるかしら。角を曲がったところにあるお店までデイミーに買い物メモを持

たせて、送らなくちゃいけないわ」

「あなたの計画をわたしのことで煩わせないでちょうだいね。わたしが何を食べても問題ないの。ここにいる間は迷惑かけたくないの」

「迷惑じゃないわ」ルーシーは認めた。

デザートのことを考えてはいたが、他に何を言うべきか分からなかった。

デイミーが果物屋から戻ってくると、台所に入ってきて、誇り高く小包を母親に手渡した。「二箱しかなかった」こう報告した。「でね、お金が足りないんだって。でも大丈夫。メモにぜんぶ書いてあったよ」

「ありがとう」ルーシーは息子にキスをした。

「お部屋に入る前に足を拭かないといけないわね、ジミー」ナニーが注意した。「台所がどれだけ汚くなったらご覧なさい。小さい子どもというのはね、他の人のことを考えられるようになるべきなの。余計な仕事を増やさないように。困ったものね」

「泥じゃないわ。すぐ拭けるわ」ルーシーはこう説明すると、困り顔のデイミーを見て微笑んだ。

「ええ、口出するつもりじゃないの、ルーシー。手伝おうと思っただけなの。掃除しな

くちやいけないのは、わたしじゃなくてあなたでしょ。昔と全然違うのね。わたしたちは全く同じ考えだったもの」

ルーシーは微笑み続けていた。「昔と違うなんて思わないわ」

「いいえ、違っているの」母親が主張した。「結婚してあなたは変わったの。それにしても、あなたの旦那には驚きよ。本当に魅力的で、とても優しく思いやりがあるわね。全部見過ごしていたわ。すぐに仲良くなれたの。彼はどうなの」

ルーシーは目を大きく見開いた。「旦那とスプレイグさんは仕事仲間よ。数カ月経てば仲良くなるわ」

「なんて可愛らしいお家かしらね」ナニーは続けた。彼女の会話は切り出してばかりだった。「もう一度家を持ちたいってどれだけの間わたしが望んでいたことなのかしら」

「ジョンとジムと私が一緒に考えて」ルーシーは母親の最後の一言を無視して続けた。

「台所と居間の水色はジョンが考えたの。居心地がよくて気楽に感じられるわ」

「そのスプレイグさんはここに落ち着いているそうね。噂にならないか心配でないの？」ルーシーは何も言わず母親を見つめた。

「家のことを説明するわ」ルーシーが提案した。

「台所に食器棚があるわね、ルーシー。無防備に見えるの。シタン材の食器棚を覚えて
いるかしら。わたしが生まれたときにお父様がお母様に送ったものよ。いとこのミニーが
骨董品店で買ってきたテーブルと椅子がとても美しく似合っていたわね」

ルーシーは機転が利くから救われた。「お金持ちになつたらきつとシタン材の食器棚に
他のものもいっぱい買うわ」こう言つて笑つた。

「からかつているの、ルーシー」母親は気分を害した調子で不平を言つた。「わたしの古
いお家の家具にあなたが少しでも興味をもつてくれたらと思つたの。あなたがそんなもの
を手に入れたらつて意味じゃないの」

ルーシーは立ち上がつて、ナニーを抱きしめた。「ええ、からかつてなんかいないわ、マ
マ。居間にいらして。デイミーが赤ちゃんだった頃の写真を見せるわ」

「本当に疲れているの。後で見るわね。昼食が出来るまで横になろうと思うの。いいか
しら？ わたしはね、毎日、数分間だけしつかりと休むことにしているの。どれだけ違つ
て見えるかあなたは分からないでしょう。あなただって何にも邪魔されないようにするべ
きよ。このおかげでわたしたちは魅力的になるの」

「そんなに上手くいくかしら。でもね、お昼寝してちょうだい。気分転換できるわ。昼

食が出来たら起こしに行くわ」ルーシーは毅然としたユーモアで話した。

「わたしの旅行カバンは安全なのかしら、ルーシー」ナニーは立ち上がると再び尋ねた。
「何かが起こりそうな不吉な予感がするの」

「それ以上心配しないで、ママ。完全に信頼できない会社をジョンが選ぶわけないわ」
「ええ、そうだといいわね」ナニーはため息をついて、廊下へと向かった。

* * * * *

六時になると、門がカチツとなつてジョンの足音が聞こえてきた。ルーシーはナニーが提案したグレービーソース作りにいっばいいっばいで、いつものようにデイミーと一緒に出迎えへは行けなかった。ジョンとナニーと一緒に台所へ入ってきたときには、取り残されたという奇妙な気持ちを抱いていた。

藤色の透けたガウンを羽織ったマーウエント夫人は胸元を開けて、フィシユーを肩に掛けていた。到着したときに果たしていた母親の役割から抜け出しているように見えた。

「ルーシーはどこだい？」ジョンが尋ねた。疲れているようで、額には汗をかいていた。
ナニーの滌刺とした容姿を見て微笑んだ。

「台所にいるわ」ナニーが答えた。「わたしはね、テーブルの準備で忙しかったの」花を

抱えていた。話していたとき、花瓶にさすことに夢中になっていた。半分開いたバラが一本、ジョンの皿にあった。

台所に入るとジョンはいつものようにルーシーにキスした。彼女が着ていたモスリンの服はエプロンで隠れていた。彼女の顔は紅潮した。料理の上に身を屈めると、緩んだ一筋の髪の毛が彼女の頬にかかった。家事を中断することなく、夫に応えた。ジョンはイグサでできた古い台所椅子に腰かけて町での出来事を語るかわりに、ダイニングルームへとすぐに向かった。

ジョンが水彩絵の具で手掛けた壁とは対照的に、ナニーが言ったとおりの飾り気のない小部屋だった。モスリンのカーテンの間から夕日がさしこんで、卓上にきちんと並べられた銀食器とガラスが輝いていた。そよ風は小さな花束の匂いを漂わせた。

ジョンが入ってくるとナニーは電気を点けた。

ルーシーが食事を盛りつけ、ナニーはテーブルまで運んだ。

「ああ、いい匂いだ！」ジョンは子どものように声をあげた。「何が食べれるんだい？」彼とナニーは席についた。

「ステーキ・キャッセロールのマッシュルーム添えよ」ナニーは説明しながら、ジョン

の袖から小さな糸くずを引っ張り出しだ。「喜んでくれるかしら。こんな時間まで働いていたなんて、お腹すいたでしょう」

「ぼくもお腹すいた！」デイミーが叫んだ。知らないうちにやってきて、座っていた。

ルーシーは今やってきて、エプロンを脱いだ。「そうなの？」と言って、座るのを躊躇った。

「どうして座らないんだ」ジョンが尋ねた。

ルーシーは座った。「ねえママ、ナフキンリングを渡してくれない？」こう尋ねると同時に、畳んだナフキンを母に回した。

「どうして。ここがあなたの席なの？」ナニーは声を大にして、立ち上がった。「来て、変わりましたよ。気づかなかったわ」

「どっちでもいいじゃないか」ジョンが割り込んだ。「さあ座って晩御飯を食べよう」

「ええ、どちらでもいいわ」ルーシーは従って、ナニーは座った。

「ねえ、わたしがここにいるから、お手伝いできるわね」ナニーが言った。「何かお手伝いしてみたいわ」

食事中、ジョンは芸術の話をした。振る舞いは若々しく、前髪が垂れさがると彼特有の

優美な身振りで掻き上げた。

「安い家のデザインをしなくちゃいけないんだ、ナニー」気まぐれに嘆き悲しんだ。「僕を呼び続けるまだ見ぬ声を聞かずにさ」

「お金が足りないなんて残念ね。才能ある芸術家なのに」ナニーが言った。

「僕は芸術家だ」ジョンは熱っぽく喜んだ。「人は芸術家であるために普通の生活から遠ざかっている必要なんてないんだ。だけど、普通の生活を軽蔑してはいけない。そこに美を見なくてはいけない」

「わたしが言ったのはね、お金を気にしないで欲しいってことよ」

「勿論さ。理解あるってわかっているよ、ナニー。だけど、貧しいからって魂の中を小さいことで詰め込む必要はないんだ。もし見ようとすれば、視覚では感じ取れない美しさが分かるんだ」ジョンは顔を上げて、自分の絵を見た。

「ここにある美しい水彩画は全てあなたのものだってルーシーが教えてくれたの、ジョン」ナニーは部屋を見回した。「どれも本当に素晴らしいわ」

「うん」ジョンの声は謙遜している。「チャンスがあったら何かしたかったんだ」

「芸術家の方たちともっと過ごせないのは悲しいわね、ジョン」ルーシーが愛情のこも

った眼差しを夫に向けた。

「可愛らしいところも大好きよ、ジョン」ナニーはすぐに言った。ルーシーが母親を見るとジョンを見つめていた。

数分してからナニーが提案した。「夕食が終わったら演奏をしてあげるわね」

「演奏していたってルーシーから聞いたことがある」彼は応えた。「一年以上昔に、ピアノを手に入れたんだ。だけどルーシーは触る時間がなかったし僕はドラムしかやらない」
「定期的な練習には多くの労力が必要よね」ナニーが返した。「だけど、わたしはわたしの音楽がとても好きなの。練習しないで過ごす日なんてなかったわ」

「冬になるとコンサートに行かなくちゃね」

「なんて素敵なの」ルーシーは微笑んだ。

「だけどね、冬にわたしがいるかなんて分からないわ。口出しする誰かがいるかもしれない」
「慎ましく視線を落とした。」

「ルーシー、どうだい！」

「もちろん冬にもいてるはずよ、ママ」

「そして、僕たちは交響楽団の演奏に行くんだ」ジョンは熱くなった。「素敵なことだよ、

ナニー。ルーシーと僕は行ったことがあるけど寒い中連れだすなんて酷かった。ルーシー、ベートーヴェンの交響曲ハ長調を覚えているだろう。すごく良かったんだ、ナニー」

「すごいわ」ナニーはにこやかに応えた。

「アレグロの楽章を聞いたら運命に歯向かう人間の魂が思い浮かぶんだ」ジョンの目は恍惚とした。「アンダンテの楽章なんて、心の疑念、疑問、そして答えがある」ジョンの顔は輝いた。デイミーは口をポカンと開けたままうつとりとする父親を見つめていた。

「音楽を聴くとわたしもそう感じるの、ジョン」ナニーは打ち明けた。「でも、わたしはあなたほど上手にわたしのことを表現できないの」

「音楽は足を切り離すんだ、ナニー。ハ長調のスケルツォがある。そこで息を呑む。もがきと悲劇についての驚くべき三重奏と再現部だ。それから答えに近い弱いピアノシモがある。フィナーレが来て、勝利の雄たけびのように興奮させる。素晴らしいよ、ナニー！」ルーシーは讚嘆のまなざしでジョンを見た。

「批評家になるべきね、ジョン」ナニーが言った。「音楽はわたしにも大きな意味があるの」

「僕はドハマりしてるんだ、ナニー」ジョンは勢いよく頭を下げた。「これからあらゆる

コンサートに行つて、楽しもうじゃないか」

ルーシーは何も言わなかった。

「ぼくも楽しめる？」突然デイミーが尋ねた。

「もちろんだ」ジョンが言った。「今ナニーがここにいて楽しいだろうか？」

* * * * *

夕食が終わるとジョンとナニーは居間に行つた。ジョンは煙草を吸つて、ナニーは彼に演奏してやつた。ウインター家には立派なピアノがあつたが、ルーシーは熱心に弾かず、多忙も相まって練習は続かなかつた。自動ピアノの購入もよく話し合つていたが、あまりに高価で手を出せなかつた。

デイミーはテーブルの上と食器を片付ける母親のお手伝いをした。片付けが終わると母親と一緒にジョンとナニーに加わつた。しかし、デイミーはすぐに眠たくなつてしまい、ルーシーがベッドまで連れて行つた。寝息が聞こえるまで母はお話を聞かせたり子守唄を歌つてあげたりした。

居間に戻るとジョンとナニーは熱心に話し込んでいた。

「来てくれ、ルーシー」ジョンがソファから呼びかけた。「君のお父さんとナニーの間

にあった問題について教えてもらっていたんだ。こんなにも酷い扱いをされていたなんて思いもよらなかった。本当に残念だ！」

「ジョン、パパのことは話せない。私たちは昔のことを話さないって思っていたわ、ママ」ルーシーは声を振り絞った。

「ナニーは誰のことも責めていない」ジョンはルーシーを引き寄せた。「そんなに怒らないでくれ」腕を回してルーシーの額にキスをした。

ルーシーは夫のボサボサ頭を撫でつけた。

「囁く鳩ね」ナニーがこぼした。「ずっと一緒だといいわね」目元に手をあてた。「わたしの人生は不幸以外の何でもないの。悲劇だけなの。友情や理解も知らなかったら、そんな人間なんて——」彼女は止まった。

「可哀そうなナニー！」ジョンはナニーの手をとった。

「わたしも愛情が欲しかったの」彼の手を握りしめて訴えた。ジョンはナニーを引き寄せてソファアームに座らせた。結果的に、彼女とルーシーの間にジョンが座る形になった。

「ここにいれば僕ら一緒に幸せになって、苦労なんて忘れられる。ルーシー、ナニーがここにいるんだから僕たちはもっと出かけなくちゃね。そうしたら昔のことなんて気にな

らないだろ」

ルーシーは優しくジョンの手を外し、立ち上がった。

「洋服を数えるのを忘れていたわ。洗濯婦が明日やってくるの」

ジョンと二人つきりになったナニーは呟いた。「可哀そうなルーシー！ あの子は今が一番あなたのリラックスできる時間ってわかってないの。夕食前に言ってくればわたしが数えておいたのに」

しばらくしてルーシーが階段を上がる音がして、ジョンが呼びかけた。「どうして入ってこないんだ、ルーシー？」

「早く寝ようとしていたからよ。明日しなくちゃいけないことがたくさんあって。ママ、私に何かできることある？ どこに何があるか分かっているわよね？」

「ええ、そうね」母親は返事をして廊下に出た。「自分のことは自分でできるわ。あなたに心配して欲しくないの。おやすみのキスをして」ルーシーは手すりにもたれかかり、母親にキスをした。

「疲れたでしょう。ここに来て、あなたのお手伝いができて嬉しいの。離れていたときは、どれだけわたしが必要だったのかしら。お母様がよく話してたわ。また元気にならな

いとね」

「もう少ししたら上がるよ」ジョンが言った。

ルーシーは服を脱いで横になった。夫と母の囁き声がかすかに聞こえた。

ジョンが寝室に入るとルーシーは眠っているようで、彼はそうと歩いた。電気を点けずに服を脱いで、彼女を起こさないように最大限の優しさもってベッドに潜り込んだ。枕にもたれる前に妻を覗くと、目がしっかりと開いていた。

「ルーシー！ すっかり寝ていたと思っていたよ」そう言って、横になり彼女を抱き寄せた。

妻は夫の腕から離れた。

「どうしたんだよ、ルーシー？」傷ついた調子で尋ねた。

彼女は返事しなかったが、黙ってすすり泣いていた。夫はもう一度抱き寄せた。今回は抵抗されなかった。

「どうしたのか教えてくれないか」

「ねえ、ジョン。私じゃない誰かが欲しい？」彼女は涙を流した。

「勿論、違うさ」激しく返事した。「どうしてそう思ったんだ？」

「分からない」はぐらかそうと返事した。熱のこもった否認によって僅かばかり慰められた。

「そう思ったから泣いているのかい？」

「違うの」

「それじゃあ、どうして？ 教えてくれないかい？」

「なんでもないわ、ジョン。私、疲れているだけ」

「分かっているよ。君にとってはハラハラの一日だった。でもナニーがここにいるから君の家事を手伝ってくれる。楽になるはずさ。頑張りすぎてたんだ」

「そう思わないわ、ジョン」

「何を思わないんだ？」

「ママがいて楽になるなんて」

彼は思いを巡らせた。

「ルーシー」

「なに？」

「君が泣いていたのは、僕がナニーとお喋りをして君と一緒にいれなかったからかい？」

「いいえ、それだけじゃない」

妻を強く抱きしめた。

「君はなんて愛しくつてバカなんだ。妬いてたなんて」彼は囁きながら笑った。「ナニーがここに来た初日だったから僕は君のためを思って良く振る舞おうと努めてたんだ。君の場所がとられるなんて一秒たりとも思わないでくれ！ ああ、僕は君を愛してる。他の人たちはただ好きなだけだ」

ルーシーは彼にキスをした。

二人はすぐ眠りに落ちた。

〈続〉

(注)

初出は、Scott, Cyril Kay. *Blind Mice*. George H. Doran Co., 1921.であり、翻訳には二〇一二年に Forgotten Books 社から出版された版を参照した。